校長室だより～燦燦～ №６８７

マフラー

2023.1.18

マフラーは暖かい。そのことを知って、まだ数年である。そもそも冬でも、コートなどの防寒着を身にまとわない人だった。これは、スーツの上にということである。週末など普段着になるときには、何かしらの防寒着は着用している。

なぜ、防寒着を必要としないのか。車通勤をしていると、外に出るのは、わずかな時間である。そこさえ我慢すれば、車内か屋内である。もう一つ理由がある。以前勤務した学校で、毎朝、校門に立っていたことがある。季節は冬となった。あるとき気づいた。１年生が防寒着を着ていない。なぜだ。寒いだろう。先生方に教えてもらった。１年生は防寒着を着てくると、先輩に目をつけられるのだそうだ。頭にきた。「よし、それなら俺も着ない」と決めた。

とはいっても、真冬だというのに、何かしらの会合などに参加する機会に、コートを着ていないのはおかしい。家人にもコートを着るように指導される。仕方なく着るのだが、着慣れていないため、トラブルが発生することがある。

ある会に参加した。所定の場所にコートをかけておいた。そこには、参加者のコートが並んでいる。会が終わった。自分のコートを着て帰路に就いた。家に入ってコートを脱ぐ。そこで初めて気づいた。自分のコートではない。滅多に着ないため、着ても自分のコートではないことに気づかなった。困った。早速、会場に電話した。フロントにコートが届いていないかと。答えは「ありません」困った。知らない人のコートで、この冬をしのぐかと半ばあきらめかけていた。

すると、会の主催者と話しているうちに、スタッフの一人が、コートを間違えて着てしまったことが判明した。「それ、私のコートです。あなたのコートは私が持っています」となった。一件落着なのだが、それ以来、コートをどこにかけておいたかを覚えておくこと、ちゃんと自分のものかどうか確かめてから着ることを実践している。

高校に勤務していたことがある。毎朝、学校の入り口に立った。冬になった。その学校は高台にあり、風が直接あたってきた。寒い。非常に寒い。やせ我慢をせずに、コートを着た。それでも寒い。つらい。ふと、マフラーというものに興味がいった。試しに買ってみた。首に巻こうとしたが、巻き方がわからない。研究した。巻いてみる。しっくりこない。今までの人生でマフラーなど使ったことがない。

それでも、ようやくだが、コートにマフラーという当たり前の姿になり、風と対峙した。暖かい。全然違う。マフラーには、これほどの効果があったのか。それまでは、防寒の効果よりもファッションなのだろうと思っていた。首を温めると、これほどまでに違うのか。勉強になった。

それ以来、野田中学校でも、冬になると、コートにマフラーという姿で立っている。あるとき、ある男子生徒に「校長先生、かっこいいですね」と声をかけられた。「あらっ、そう。どうもありがとう」気分はわるくない。これがコートだけならば、こうはならないだろう。マフラーが重要なのである。

マフラーのおかげで、だいぶ防寒対策は進んだが、足先と指先はどうにも厳しい。だが、風に立つ校長として、いずれやってくる春まで、やせ我慢を通したい。